

芸術学部 デザイン学科 椅子資料解説 (2)

Commentaries of chair collection in Dept. of Design Faculty of Fine Arts. (2)

デザイン学科

安 武 正 剛

a translation by Seigo YASUTAKE

はじめに

普段我々が何気なく使っている椅子の歴史には、王や組織の長などが権力の象徴としたものと、職人たちが労働する際の身体を支持する道具として用いたものがある。17世紀も末になると、象徴としての椅子も座り心地などが配慮され、徐々に機能的になっていく。18世紀に入ると、建築様式とともにそれぞれの様式に合わせた装飾が施されるが、機能面も十分に考えられたものになっている。同じ頃、イギリスの農村で農民が自作していた丈夫な実用的な椅子は、産業革命を機にウィンザー地方の工房でつくられるようになる。その製造工程は部位ごとの分業によるもので、後に工業製品となるきっかけとなった。この椅子はアメリカに渡り改良され、「ウィンザー・チェア」として発展していった。同じくイギリスからアメリカに渡ったシェーカー教徒が自給自足の生活の中から作りだした「シェーカー・チェア」はシンプルで軽く、無駄のない美しいフォルムで、後の椅子デザインにも影響を与えた。

椅子が広く大衆に馴染みのものとなったのは、1850年代にミヒャエル・トーネットが発表した、曲木の椅子からである。曲木の技術は一本の木を蒸し、治具で抑えて曲げる方法で、薄くスライスした木を何枚も重ねて曲げる成形合板より効率が良かった。トーネットはこうした素材の加工技術の開発ばかりでなく、生産性を高めるために、原材料の生産地近くに工場を建てたり、パーツを別々に作り、一つに梱包して輸送し、販売先で組み立てるといった近代的な産業のシステムをも確立した。

産業革命の影響で生じた新しい芸術運動や様式は、それぞれの思想から工芸的、装飾的な新しい

デザインの作品を発表した。しかし生活様式の合理化が進むと、機能性、生産性が求められていった。

最近の椅子事情をみると、今までこれほど椅子に関心が寄せられた時期があったらと思うほどである。これまで雑誌や映像で一度は目にしたことがあるような椅子が、映画やテレビ、広告などのメディアに頻繁に登場し、椅子を特集した雑誌が書店に並び、毎日のようにこれらを目にする。特にブームの火付け役となったのは、「ミッドセンチュリー」と呼ばれる1950年代を中心にその前後の1940年代から1960年代に登場した椅子である。イームズらは成形合板による三次曲面の椅子の研究を続け、美しいフォルムを完成させた。第二次世界大戦によって生じた軍需産業がもたらした新素材や新技術は、戦争で抑圧された反動と、たまたま同時期に存在した、多くの才能が出会い、一挙に発展していった。その中心的存在のチャールズ&レイ・イームズ、エーロ・サーリネン、ジョージ・ネルソンなどのデザイナーたちは、いろいろな分野の才能との交流を持ち、現代アメリカの礎となった。

近年では、折りたたみ (folding)、分解・組み立て (knock down)、積み重ね (stacking) など流通時の効率化や収納を考えた製品や、リクライニング (reclining)、健康的 (healthy)、調整可能 (adjustable) など、パソコンの普及で変化したワーキングスタイルのおよぼす身体への影響を考え、人間工学に基づいた健全な身体保持の調整機構を持ち、ハイテク素材を使用した製品が普及してきた。

このように椅子のデザインを通して、生活のスタイルや時代背景、素材や技術の開発など、我々

の生活との結びつきを知ることができる。

解説

芸術学部デザイン学科の椅子資料解説(1)[注1]が、平田らによって報告されてから、早14年が経つ。その間標本の数も増え、2004年現在、100種類104点となった。ミヒャエル・トーネット以降の名作椅子と呼ばれるものの中には、すでに生産されていないものや、近年の異常なまでの椅子ブームの影響でプレミアが付き、高価になったものなどで、補充が困難になった。しかし、技術の発達によって量産が可能になり、復刻されたものや、近年の新素材の開発によって生まれたオフィス・チェアなども加えられた。

この椅子資料解説は10脚の椅子の解説で、解説(1)の形式に合わせ、最初に作者名と作品名、発表年、を表記し、次に作者と作品の解説を行い、最後に製造会社を記す。

1

オットー・ワーグナー

(Otto Wagner 1841-1918)

「アーム・チェア 247」

「Arm Chair 247」

1902

オットー・ワーグナーはウィーンに生まれ、1857年にウィーン工科大学、1860年にベルリン建築大学、1861年から1863年までウィーン美術アカデミーで建築を学ぶ。1894年、アカデミーの教授となり、建築学特別クラスを指導。彼の生徒にはヨーゼフ・ホフマン、アドルフ・ロース、ヨーゼフ・マリア・オルブリッヒなどがある。1899年から1905年までウィーン・ゼツェションのメンバー。また、ドイツ工作連盟の一員として、オルブリッヒが運営を担当する大きな建築・デザイン事務所を持っていた。

彼はウィーンの都市改造や鉄道計画を行った建築家であり、都市計画家でもある。アール・ヌーボー様式や当時の最新の素材であるアルミニウムやガラスを用いて多くの建築を設計している。

この「アーム・チェア 247」は「ウィーン郵便貯金局の椅子」とも呼ばれ、ワーグナー自身の設計したウィーン郵便貯金局の会議室のためにデザインされたもので、前脚と背を一本の曲木で成型した初めての椅子である。前脚からアーム、背もたれへと続くラインと、後脚や貫も角材の曲木で作られている。脚の先端部分やアームの手の当たる部分に真鍮板を貼り、背もたれの曲面には大小の丸い穴をあけて装飾性をもたせているが、この装飾や当金は実用性だけではなく、家具としての気品と落ち着きを与えている。これは彼の建築における装飾性と同様の表現要素である。全体的なスタイルはゲブリューダ・トーネットの「ウィーン・チェア」の形態からリ・デザインされたものではないかと考えられ、また、明式家具の影響も見られる。この時期に流行のきざしがみえてきたアール・デコ様式のスタイルに、ミヒャエル・トーネット(Michael Thonet 1796-1871)が開発した曲木の技術を活用している。この椅子のバリエーションは1913年頃までに10数種類がデザインされた。

…ゲブリューダ・トーネット

2

ヘーリット・リートフェルト

(Gerrit Rietveld 1888-1964)

「レッドアンドブルー・チェア」

「Red and Blue Chair」

1918

リートフェルトはユトレヒトにある父の指物工房で修行する。1906年から1911年まで宝石デザイナーとして働きながら、ユトレヒトの美術工芸博物館の夜間授業に通う。その後家具職人として独立する。一方で建築家P.J.クラールハメールに弟子入り。1918年デ・スティルのグループに参加し、中心的メンバーになる。

1917年、オランダで画家や建築家たちが〈デ・スティル〉を結成した。そこでは「芸術を急進的に革新すること」を目標とし、垂直・水平を強調した、明確で幾何学的な空間構成を、建築や家具

の分野に応用することであった[注2]。

この椅子の空間と色彩のコンポジションは、まさにデ・スティールの理念そのもので、モンドリアンが風景面を幾何学的に抽象化したように、リートフェルトは伝統的安楽椅子の形態を抽象化し、平板と角材だけに還元した[注3]。この椅子には、幾つかのバリエーションがあり、黒い角材と、赤い背板、青い座板に塗装された現行モデル（イタリア、カッシーナ社）は1928年からのもの。同じデザインでフレームの角材の断面が3.3cm角のものと、2.5cm×2.6cmの2タイプがあったが、現行モデルは細いタイプである[注4]。

この見た眼には、ゴツゴツと角張った、派手な形態と色彩が、実際に腰を掛けてみると、尻・背・肘の高さ・広さ・幅とそれぞれの角度等の関係が、意外に心地良い。伝統的な家具部材の接合法を廃し、量産のシステムをイメージさせる。

…カッシーナ社

3

マルセル・ブロイヤー

(Marcel Breuer 1902-1981)

「ワシリー・チェア」

「Wassily Chair」

1925

ハンガリー生まれのブロイヤーは、ドイツ・ワイマールのバウハウスの第一期生として学び、1925年に自身がマイスターとなって、学生の指導にあたった。1937年にヴァルター・グロピウス (Walter Gropius 1883-1969) とともに、アメリカへ渡り、1946年までハーバード大学建築学部の教授を務める。

これはスチールパイプを使用した世界初の椅子で、バウハウスを代表する作品。一見継ぎ目のない曲げられたパイプが、椅子の輪郭を形成し、革が座面と肘、背もたれに張られている。

スチールパイプはブロイヤーによるアームチェアで初めて一般用家具に導入され、家具生産における美的転換点になるとともに、ひとつの重要な産業分野の成立にもつながった。スチールを使用

した椅子は1850年頃に登場するが、スチールパイプ製のものとなると、この椅子がその最初の頃のものである。ブロイヤーが入手したアドラー自転車のハンドルがヒントになったのであるが、スチールパイプを曲げる技術が、当時は確立されておらず苦勞したようである。マルト・スタムの作品に見られるように、曲げ部分に鋳物製のガス管を使用したり、鋼管の中に砂を入れたりしていたようだ。この椅子の名前はバウハウスの教授、ヴァシリー・カンディンスキーに因んでつけられたものである[注5]。

…ノル・インターナショナル社

4

ミース・ファン・デル・ローエ

(Mies Van Der Rohe 1886-1969)

「バルセロナ・チェア」

「Barcelona Chair」

1929

ミース・ファン・デル・ローエは、ドイツのアーヘンに生まれ、1905年にペーター・ベーレンスの弟子となる。1911年には建築家として独立し、1926年から1932年までドイツ工作連盟の副議長を務める。1930年から1933年までバウハウスの学長を務めたが、バウハウスの解体でアメリカに渡り、イリノイ工科大学建築学科を設立する。

ミースの代表作と言えるこの椅子は、1929年バルセロナ万国博覧会のドイツ・パビリオンのためにデザインされたものである。このパビリオンは、スペイン国王アルフォンソ13世と王妃ヴィクトリア・エウヘニアによる開会式の会場でもあったことから、ミースは国王夫妻を迎えるための王座として特別に用意したのである。X型のフレームは、エジプトや古代ギリシャの支配者たちの権威の象徴である鋏型の折り畳み式椅子や、馬車のスプリングなどからヒントを得たものではないかと思われ、優雅に形成されている。この建物はミースの建築理念に基づいて設計されたもので、彼の理想が見事に実現された空間の中でこの作品は、品位、威厳、風格など、あらゆる意味におい

て建築と理想的に組み合わせられたものであった。

当時のオリジナル・モデルは、フレームはクロームメッキの平鋼製で、交差部で溶接され、左右両側面は同断面の貫で接合されていた。座面と背もたれの部分は、革ベルトの上に白い山羊革で張られたクッションが載せてあった。その後、接合部は何度も変更され、1948年に全体が溶接されたフレームに代わるが、最終的に1964年には、クロームメッキの平鋼は研磨仕上げの特殊鋼に取って代わられた。

精緻な溶接や一枚一枚縫い合わせた革の角にボタンをつけた縫製、鏡面仕上げの研磨など手間のかかる手作業のため高価だが、この王様の椅子は大企業の役員室やロビーなどに使われ、商業的な成功を収める[注6]。最近では、テレビのCMやドラマ、映画などで頻繁に使用され、その影響で日本でも一気に有名になった。

…ベルリナ・メタルゲヴェルベ・ヨーゼフ・ミューラー、ノル・インターナショナル

5

チャールズ・イームズ

(Charles Eames 1907-1978)

「ラウンジチェア&オットマン」

「Lounge Chair & Ottoman」

1956

イームズは、椅子資料解説(1)[注7]でも紹介した、「シェル・チェア」をはじめ多くの作品を世に送りだした、アメリカを代表する家具デザイナーで、モダンデザインの先駆者である。1928年、ワシントン大学の建築科を卒業後、エーロ・サーリネン(Eero Saarinen 1910-1961)と共同で椅子のデザインにあたった。第二次世界大戦中は航空機の座席などの成形合板技術の研究に従事し、合板の三次元曲面の実用化を行った。戦後、この技術を後援しつづけたハーマン・ミラー社の家具デザインで活躍した。彼の作品は世界中で愛用され、企業も急成長を遂げる。

この椅子は、量産向きの良心的な他のイームズ作品とは一線を画し、他のどんな椅子よりも座り

心地の良さを追求した究極の椅子である。しかし、彼の他の作品とくらべ、一見複雑に見えるフォルムも、シンプルな合板製の椅子と同じ原理で作られている。革張りのクッションを付けた成形合板の3つのシェルは、金属部品によって結合され、アルミニウム製の脚とともに構造体を形成している。非常に大振りなフォルムではあるが、成形合板とクッションの簡単な取り付け方など、輸送時のことを考え、ノックダウン式でコンパクトに納められるように工夫されている。熟練の職人による手間のかかる製造法のため高価である。またその究極の座り心地は、この大振りなオットマンに脚をのせて初めて味わえる。

…ハーマン・ミラー社

6

シャルロット・ペリアン

(Charlotte Perriand 1903-1999)

「ペリアン・チェア S-7260s」

「Perriand Chair S-7260s」

1955

ペリアンは1903年パリに生まれ、1920年から1925年までパリ装飾美術学校でインテリアデザインを学ぶ。1927年からル・コルビュジェ、ピエール・ジャヌレの建築事務所に入り、スチールパイプの家具の開発などを手掛ける。1940年、ジャン・ブルーヴェらと建築事務所を設立する。1940年から1942年まで当時の商工省の招きで工芸の指導のため来日、日本各地の地場産業を廻り新しいデザインの指導にあたった。このとき、柳宗理が同行したことは有名な話である。彼女はこの間フランス・デザインの展覧会を二回開催しており、日本のデザイン界にも影響を与えた。

この椅子は1955年、日本橋高島屋で開催された「ル・コルビュジェ、レジェ、ペリアン3人展」のため、東京の三好木工で製作された。8枚の薄板から成る積層合板を一体成形したもので、優美な曲線美を持つ食卓用の小椅子である。当時は製品化されず、後に二度復刻されている。最初に発表された際にはクッション付きのものもあった。

現在の製品は、96年から天童木工が復刻したもので、スタッキングができる。オリジナルは黒で、影という意味の「オンブル」とも呼ばれている。

…ハードウェア商会、天童木工

7

エーロ・サーリネン
(Eero Saarinen 1910-1961)

「チューリップ・チェア」

「Tulip Chair」

1956

サーリネンは1910年、フィンランドに生まれ、1923年、一家でアメリカへ渡る。1929年から1930年までパリのアカデミー・ド・ラ・グラン・ショミエールで彫刻を学び、1930年から1934年までイェール大学で建築を学ぶ。1940年チャールズ・イームズと共に製作を始め、ニューヨーク近代美術館主催のコンペ「住宅装備における有機的デザイン」で第一席を受賞する。その後、イームズはハーマン・ミラー社の、サーリネンはノール社の製品を専属でデザインするようになる。

サーリネンは建築界ばかりではなく、イームズとの結びつきによって、アメリカの家具デザインに多大な影響を与えた。

チューリップ・チェアは、サーリネンが50年代の半ばに一連の椅子、スツール、テーブルなどを開発した中の一つである。これらの特徴は、支持構造が中央の支柱一本で支えるペDESTAL構造[注8]で出来ていることである。彼は、テーブルと椅子のセットを考えた時の脚の乱雑さを、少しでも少なくすっきりと整えたいと考え、ウィングラスのようなしなやかな脚を持つ一本脚の椅子を生んだ[注9]。ほっそりしたラッパ形の台にFRP製のシェルが載っている。彼は脚まで同一素材を望んだが、強度の問題で脚はアルミニウムが使われている。しかし、樹脂コーティングを施しており、一見同一素材に見える。「将来一つの素材でこの椅子ができればいいんだが」[注10]という希望はいまだかなえられず、今日でもまだオリジナルの形態のまま生産されている。

…ノル・インターナショナル社

8

柳 宗理

(Sori Yanagi 1915-)

「バタフライ・スツール」

「Butterfly Stool」

1956

柳宗理は1915年、東京に生まれる。1940年、東京美術学校（現在の東京芸術大学）洋画科を卒業。1940年から1942年まで、工芸の視察・指導のため全国を廻るシャルロット・ペリアンに同行。1942年、坂倉建築事務所の研究員となる。1946年、工業デザインの研究に着手。1952年、第1回新日本デザインコンクール（毎日新聞社主催／1959年より毎日工業デザイン賞、現毎日ID賞）にて第一席、第二席を受賞し、その年、財団法人柳工業デザイン研究会を設立する[注11]。1977年、父の宗悦が開いた日本民芸館の館長に就任。生活用具や家具、高速道路などの環境構造物まで手掛け、戦後日本の工業デザインの基礎を築いた一人である。

このバタフライ・スツールは日本のデザイナーが世界的に評価された最初の作品で、まさに日本を代表する名作である。このスツールのデザインは発表までに2～3年の開発期間がかかっている。当時積層合板での技術開発に、山形の工芸試験場において、後に天童木工に入った乾三郎の協力なしでは、この作品の完成はなかったであろうといわれている。当時の試行錯誤の経験が彼のデザイン考「デザインは技術者との共同作業だ」ということばに表れている。プロダクトデザインでは、機能的で、美しく、価格が適正なことや、量産に向けたデザインであること、また輸送が容易な構造（組み立て・分解ができるノックダウン構造など）であることが重要である[注12]。わずか7ミリ厚の三次元曲面を持つ同じ形の2枚の成形合板が、2個のボルトと1本のステーで左右対称に組み合わされている。その形態は、蝶のはばたきのようにもあり、神社の鳥居や両手を合わせて開いた形

にもイメージされ、東洋的な精神性を表す形態のようでもある。1957年、日本が初参加したミラノ・トリエンナーレで金賞を受賞する。1958年、ニューヨーク近代美術館の永久コレクションをはじめ、アムステルダム市立美術館、ルーブル美術館など世界中の美術館の永久コレクションになっている。発表から40年以上経った今でも、生産され続けている日本デザインの代表作である。

…天童木工

9

チャールズ&レイ・イームズ

(Charles & Ray Eames)

「ラ・シェーズ」

「La Chaise」

1948

イームズが1935年に設計した、セント・メリーズ教会が掲載された雑誌を目にしたエリエール・サーリネンは、彼をクランブルック美術学校の研究員として招いた。この時期クランブルックには、後にアメリカを中心に近代家具の分野で活躍する面々が集まっていた。その中に、後のイームズ婦人となるレイ・カイザーもいた。

レイは1912年サクラメントに生まれ、幼いころから絵を描きはじめる。1933年から当時前衛的な抽象画家として有名なハンス・ホフマン(Hans Hoffman)に師事する。1936年にはアメリカ抽象画家連盟を結成し、創立メンバーとして活躍する。1940年に友人の勧めもあって、クランブルック美術学校に入学する。しかしこれは、これまでの前衛的な傾向とは違ったアーツ&クラフツ的な雰囲気の中で、彼女にとっては新しいデザインの分野への第一歩となった。

イームズ夫妻は家具デザインをはじめ、展示デザイン、写真、映画、グラフィックデザインの分野まで活躍した。

1948年、ニューヨーク近代美術館(MoMA)の主催による「ローコスト家具デザインコンペ」が催され、イームズ夫妻はスチール板とアルミニウム板をシェル状に成形した椅子のデザインで2位

を獲得した。この「ラ・シェーズ」もこのコンペのためにデザインしたものであるが入選はしなかった、しかし、そのエレガントなスタイルは応募作品の中でも注目され、1950年のカタログや展覧会にまで登場した。

端に沿って廻らされたゴムを2枚の薄いFRPで挟むように接着し、すき間の空洞にスチレンを充填している。脚部は床面にX形に交差した木製の部材に、5本の金属棒を挿入し、そのうち2本は交差している。「ラ・シェーズ」という名は、彫刻家ガストン・ラシェーズ(Gaston Lachaise 1882-1935)の「浮かぶ姿」(1927)という豊満な女性像が、この椅子と調和すると思ひ、つけた名前である。もちろん、Chaiseがフランス語で椅子を指すこともかけている[注13]。

…ヴィトラ

10

ヴァーナー・パントン

(Verner Panton)

「パントン・チェア」

「Panton Chair」

1960

デンマーク生まれのヴァーナー・パントンは、ポール・ケヤホルムやアルネ・ヤコブセンと同様、木材による北欧の伝統家具製作を異にしたグループのひとりである。彼はコペンハーゲンの王立美術アカデミーで建築を学び、1950年から1952年までアルネ・ヤコブセンの事務所で働く。その間ヤコブセンの「アント・チェア」のデザインにも参加している。その後ヨーロッパ各地を巡り、さまざまなデザインを学んだ。彼はすでに1950年の終わりに、ダンスク・アクリル・テクニーク社と共に、プラスチックで「パントン・チェア」の原型を開発していたが、適切な製造業者が見つからず、積層材を使った仕事に戻った。しかし安価で生産でき、形態の自由性に富んだ新しいプラスチック素材に魅了されていた彼は、1962年ヴィトラを訪れ、ハーマン・ミラー社の製品を生産していたフェールバウム父子と出会い、何年もの実

験の末、1967年に最初のFRPのプロトタイプをつくりだした[注14]。

この「パントン・チェア」は、自由な形状がつかれるというプラスチックの特性をいかし、曲面をうまく活用することで全体的な構造が成立している、世界で初めての一体成形の椅子である。ただしこの椅子と同じようなフォルムで、すでにケアホルムがスチールロッド製のプロトタイプを製作していた。しかし、ひとつの素材で継ぎ目も切れ目もなく、背面、座面、脚部が一体化した椅子にこだわり続けたパントンは、10年あまりの歳月をかけ製品化に成功した。

オリジナルは、1968年に商標ハーマン・ミラー、製造ヴィトラで高硬度発泡ポリウレタンによる射出成型で本格的に生産にはいったが、成形後の工程が多く、大量生産や安価提供が難しく、FRPに素材変更された。しかし強靱なポリウレタンに比べ、強度にやや難があったFRPは全体を厚いフォルムに修正している。本学のコレクションは90年代後半より生産されているポリプロピレン製。表面のマットな素材感がオリジナルとは異なる[注15]。

…ハーマンミラー、ヴィトラ

謝辞

この解説にあたり、デザイン学科教授 車政弘先生に教示いただき、また椅子の資料リスト作成や資料提供などの多大なご協力を賜りました。資料写真は本学美術館と写真学科教授 鉛山洋一先生にご提供賜りました。ここに記して深謝いたします。

注

- 1) 平田克二・車政弘、芸術学部 デザイン学科 椅子資料解説 (1)、芸術学部研究報告、第22巻、1990、P121-P144
- 2) 「20世紀の名作椅子200人の200脚」展、神戸ファッション美術館、2000、P29
- 3) 「20世紀ベスト100チェア」、BRUTUS/461、2000、P32

- 4) 「20世紀の名作椅子200人の200脚」展、前掲書、P29
- 5) 「20世紀の名作椅子200人の200脚」展、前掲書、P33
- 6) 「20世紀ベスト100チェア」、前掲書、P34
- 7) 平田克二・車政弘、芸術学部 デザイン学科 椅子資料解説 (1)、前掲書
- 8) 「椅子の研究2」、World Mook 325、(株)ワールドフォトプレス、2001、P90
- 9) 「20世紀ベスト100チェア」、前掲書、P42
- 10) 「20世紀ベスト100チェア」、前掲書、P42
- 11) 「柳宗理のデザイン-戦後デザインのパイオニア」展、セゾン美術館、日本経済新聞社、1998
- 12) 「20世紀の名作椅子200人の200脚」展、前掲書、P89
- 13) カーサ ブルータス、vol.35、マガジンハウス、2003、P79
- 14) いす・100のかたち、ヴィトラ・デザイン・ミュージアム、1997、P164
- 15) オレ椅子 インテリアスタイル、立風書房、2003、P52-53

参考文献

- 1) イームズ時代の家具の本、えい出版社、2003
- 2) 椅子の辞典、白夜書房、2003
- 3) 世界の傑作品／世界の名作椅子100、ワールドフォトプレス、2004
- 4) ジャパニーズチェア／CONFORT、建築資料研究所、2002
- 5) 日本の木の椅子／別冊商店建築 78、商店建築社、1995
- 6) 近代椅子学事始／WORLD MOOK 391、ワールドフォトプレス、2002
- 7) 建築家の椅子111脚、SD第381号、1996
- 8) 渡辺力、ハーマンミラー物語、平凡社、2003
- 9) 島崎信、椅子の物語、NHK出版、1995
- 10) LIVING design 38、リビング・デザインセンター、2004
- 11) カール・マング著／安藤正雄訳、「現代家具の歴史」A.D.A.EDITA Tokyo、1979

表1.1 芸術学部椅子資料一覧 (2004年10月現在)

番号	作 者	作 品 名	W*D*H/S*H(cm)	備品番号
1	ミヒャエル・トーネット Michael Thonet (1796-1871)	トーネット「No.14」 1859 曲げ木・藤張り トーネット社	43・52・84/46	ウE89-11
2	ミヒャエル・トーネット Michael Thonet (1796-1871)	ロッキング・チェア「No.7027」(レプリカ)1860 曲げ木・藤張り 秋田木工	50・108・101/43	ウC49-4
3	ゲブリューダー・トーネット Gebruder Thonet	スリーレグ・チェア 225P 1900 ブナ材曲げ木 ゲブリューダー・トーネット社	62.5・56.5・71/47	ウC95-8
4	オットー・ワグナー Otto Wagner (1841-1918)	アーム・チェア247 (郵便貯金局の椅子) 1902 ブナ材曲げ木・布張り ヤコブ&ヨーゼフ・コーン社、トーネット社	57・56・80/43	ウC92-2
5	チャールズ・レニー・マッキントッシュ Charles Rennie Mackintosh (1868-1928)	ヒルハウス ラダーバック・チェア 1902 トネリコ材・ベルベット カッシーナ社、帝国ホテル	41・39・140/45	ウC58-4
6	フランク・ロイド・ライト Frank Lloyd Wright (1867-1959)	「ミッドウェイ、1」 1914 サクラ材・布張り カッシーナ社	52・48・87/45.5	ウE89-6
7	ヘーリット・リートフェルト Gerrit Rietveld (1888-1964)	レッド アンド ブルー・チェア 1918 ブナ材・合板アニン仕上げ カッシーナ社	65・83・87/33	ウE89-14
8	ヘーリット・リートフェルト Gerrit Rietveld (1888-1964)	ジグザグ・チェア 1934 ウォールナット カッシーナ社	37・43・74/43	ウE58-2
9	マルセル・ブロイヤール Marcel Breuer (1902-1981)	ワシリー・チェア 1925 スチールパイプ、皮革張り ガヴィーナ(ノル社のブランド)	79・70・73/45	リG50-61
10	マルセル・ブロイヤール Marcel Breuer (1902-1981)	ラウンジ・チェア 1971 スチールパイプ、藤張り トーネット社	65・83・84/35	ウE62-2
11	マルセル・ブロイヤール Marcel Breuer (1902-1981)	チェスカ・チェア 1928 スチールパイプ、藤張り ガヴィーナ(ノル社のブランド)	47・60・78/43	リG50-62
12	マルト・スタム Martinus Stam (1899-1986)	カンティレバー・チェア 1926 スチールパイプ、皮革張り トーネット社	50・57・85/46	ウC92-4
13	ル・コルビジエ・シャルロット・ベリアン ピエール・ジャンヌレ Le Corbusier (1887-1968) Charlotte Perriand (1903-1999)	角度調節自在の寝椅子 LC-4 1928 (カウボーイ・チェア)(シェーズ・ロング) スチールパイプ、皮革張り ホームライン社	59・160・85	ウE89-15
14	ルードウィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ Ludwigh Mies Van Der Rohe (1886-1969)	MR ダイニング・チェア S533RF 1927 スチールパイプ、藤張り トーネット社	57・84・82/44	ウC95-4
15	ルードウィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ Ludwigh Mies Van Der Rohe (1886-1969)	バルセロナ・チェア 1929 ステンレススチール・皮革張り ノル・インターナショナル	75・75・75/42	ウC58-7
16	アルヴァ・アアルト Alvar Aalto (1898-1976)	アーム・チェア 41 (パイミオ・チェア) 1929 積層材、成形合板 アルテック社	61・50・68/29	ウE59-1
17	アルヴァ・アアルト Alvar Aalto (1898-1976)	サイド・チェア 1933 積層材、成形合板 アルテック社	38・42・78/44	ウE60-3
18	アルヴァ・アアルト Alvar Aalto (1898-1976)	スタッキング・スツール 1954 積層材、成形合板 アルテック社	φ35/43.5	ウE60-4, 5 2脚あり
19	アルヴァ・アアルト Alvar Aalto (1898-1976)	X600スツール 1954 シートアッシュ、集成材 アルテック社	φ38/44	ウE89-12
20	カール・ブルーノ・マッソソン Karl Bruno Mathsson (1907- 1988)	EVA チェア T102 1942 積層ブナ材、ヘンブウェーピング DUX mobil社、マッソソン・インターナショナル社	58・65・83/39	ウ89-2
21	ハンス・J・ウェグナー Hans J. Wegner (1914-)	ピーコック・チェア 1947 トネリコ材、チーク材、縄編み ヨハネス・ハンセン社	76・76・104/3	ウE61-1
22	ハンス・J・ウェグナー Hans J. Wegner (1914-)	チャイニーズ・チェア 1947 トネリコ材、縄編み P.Pモブラー社	55・55・82/45	ウE89-13

表1.2 芸術学部椅子資料一覧 (2004年10月現在)

番号	作 者	作 品 名	W*D*H/S*H(cm)	備品番号
23	ハンス・J・ウェグナー Hans J. Wegner (1914-)	ザ・チェア 1949 チーク材、藤張り ノル・インターナショナル社	62・52・76/44	ウC49-2
24	ハンス・J・ウェグナー Hans J. Wegner (1914-)	パチェラーズ・チェア 1953 ナラ材、チーク材 ヨハネス・ハンセン社もしくはノル社	50・53・95/43	ウE57-2
25	ハンス・J・ウェグナー Hans J. Wegner (1914-)	アーム・チェア ホワイトラッカー塗装 GETAMA社	54・45・70/42	ウE89-16
26	アルネ・ヤコブセン Arne Jacobsen (1902-1971)	アント・チェア 1953 (1950-52) 圧縮成形のブナ材の合板、スチールパイプ フリッツ・ハンセン社	48・48・77/44	ウC49-1
27	アルネ・ヤコブセン Arne Jacobsen (1902-1971)	セブン・チェア (3017) 1955 beech, lacquar finish・seat・padding フリッツ・ハンセン社	55・52・78/44	ウC95-9
28	アルネ・ヤコブセン Arne Jacobsen (1902-1971)	スワン・チェア 1958 FRP、皮革張り、アルミ フリッツ・ハンセン社	74・68・75/38	ウE89-9
29	ポール・ケヤホルム Poul Kjaerholm (1929-1980)	チェア prototype 1957 ステンレススチール、皮革 フリッツ・ハンセン社, E.KOLD CHRISTENSEN LTD.	69・68・73/38	ウE89-10
30	ポール・ケヤホルム Poul Kjaerholm (1929-1980)	チェア PK25 スチール、縄 フリッツ・ハンセン社	70・74.5・73.5/39.5	ウE89-1
31	作者不明	シューメーカー・チェア 15c- ビーチ材 デンマーク	53・41・49	ウC95-3
32	モーゲンス・コッホ Mogens Koch (1898-1992)	MK フォールディング・チェア (children) 1932 ブナ材、キャンバス、皮革	37・37・61/	ウC95-3
33	ジョージ・ネルソン George Nelson (1908-1986)	スワッグド・レグ・チェア 1958 FRP、ステンレススチール ハーマン・ミラー社	71.5・63.5・86/47	ウE98-1
34	チャールズ・イームズ Charles Eames (1907-1978)	イームズ・ラウンジ・チェア&オットマン 1956 成形合板、アルミ、皮革張り ノル・インターナショナル社	86・84・83/38 66・58・44.5	ウE60-1 ・2
35	チャールズ・イームズ Charles Eames (1907-1978)	イームズ・シェル・チェア 1950 FRP、スチールロッド、ビニールレザー ハーマン・ミラー社	64・60・77/43	リG46-2
36	チャールズ・イームズ Charles Eames (1907-1978)	ロッキング・チェア 1950 FRP、スチールロッド、木 ハーマン・ミラー社	64・60・77/43	リG46-2
37	チャールズ・イームズ Charles Eames (1907-1978)	ラウンジ・チェア (エグゼクティブ・チェア) 1961 アルミ、ビニールレザー、クロス ハーマン・ミラー社	73・63・75/39	リG46-1 ウG48-97 2脚あり
38	チャールズ・イームズ Charles Eames (1907-1978) Copen/Applied Art Museum	ダイニング・チェア (DCW) 1944 birch・plywood	55・58・67/39	ウC95-7
39	エーロ・サーリネン Eero Saarinen (1910-1961)	チューリップ・チェア 1956 FRP、アルミ ノル・インターナショナル社	66・60・79/43	ウE62-1
40	ハリー・ベルトイヤー Harry Bertoia (1915-1978)	ダイヤモンド・チェア 1952 スチールワイヤー、ラバーパッド ノル・インターナショナル社	85・71・77/40	ウC49-3
41	ジオ・ポンティ Gio Ponti (1891-1979)	スーパー・レジェーラ 699 1952 トネリコ材、藤張り カッシーナ社	41・47・83/45	ウE58-5
42	ジオ・ポンティ Gio Ponti (1891-1979)	トネリコ・チェア 1957 トネリコ材、皮革張り カッシーナ社	40・43・83/43	ウE57-3
43	ジオ・ポンティ Gio Ponti (1891-1979)	ポンティ・ポンティ (カブリエラ) 1973 ステンレススチール、皮革 パルッコ社	59・60・100.5/26	ウE89-3
44	チャールズ・ポロック Charles Pollock (1930-)	アーム・チェア 657 1960 スチールパイプ、皮革、プラスチック ノル・インターナショナル社	63・68・71/41	ウC58-2

表1.3 芸術学部椅子資料一覧 (2004年10月現在)

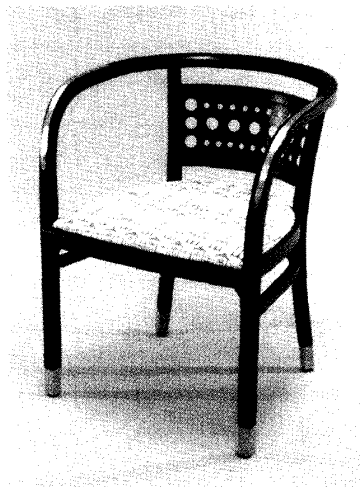
番号	作 者	作 品 名	W*D*H/S・H(cm)	備品番号
45	ワーレン・プラットナー Warren Platner (1919-)	アーム・チェア 1964 スチールワイヤー、FRPシェル、布張り ノル・インターナショナル社	67・56・74/48	CC58-3
46	ジョージ・ナカシマ George Nakasima (1905-)	ナカシマ・アーム・チェア 1945 ウォールナット材 サクラファクトリー社	80・65・84/34	ウE58-1
47	アンドレス・ヴァン・オンク Andres Van Onck ()	クリケット 1958 ABS樹脂、スチール マジス社	40・53・82/45	ウE62-15
48	柳 宗理 Munemichi Yanagi (1915-)	バタフライ・スツール 1956 成形合板 天童木工社	42・31・39/34	ウE48-5
49	渡辺 力 Riki Watanabe (1911-)	リキ・ダイニング・アーム・チェア 1984 オーク材 インテリアセンター社	62・55・90.5/40	ウE88-7
50	剣持 勇 Isamu Kenmochi (1912-1971)	ラウンジ・チェア 1960 藤編み、置きクッション やまかわラタン社	81・78・72/33	ウE89-5
51	豊口 克平 Katsuei Toyoguchi (1905-)	スポーク・チェア 1963 ナラ材、布張り 天童木工社	81・68・83/34	ウC95-13
52	長 大作 Daisaku Cho()	低座椅子 T-5016N 1965 積層合板、布張り 天童木工	55・66.5・65/29	ウC95-14
53	新居 猛 Takeshi Nii (1920-)	ニー・チェア 1970 スチールパイプ、布、木 ニイファーニチャー社	62・77・84	ウE48-7
54	ヴィコ・マジストレッティ Vico Magistretti (1920-)	セレーネ 1969 FRP圧縮成形 アルテミデ社	39・50・76/43	ウE57-4 2脚あり
55	ピエ・ロ・ガッティ チェザーレ・パオリーニ フランコ・テオドロ P Gatti(1940- C Paolini(1937- F Teodoro(1939-)	サッコ 1968 布、ポリウレタン細粒 ザノッタ社		ウC49-5
56	ガエ・オウレンティ Gae Aulenti (1954-)	アーム・チェア 1975 アルミ押出成型、布張り ノル・インターナショナル社	80・86・75/41	ウC58-1
57	カルロ・バルトリ Carlo Baruturi()	バルトリ・チェア プラスチック カルテル社	45・41・73/43	ウE62-16
58	デューク・スタシュ Dukes Sutashy()	エフォボ・スツール 1970 プラスチック アルテミデ社	42・44・40/28	ウC49-19 2脚あり
59	マリオ・マレンコ Mario Malenco	アーム・ソファ 1971 ポリウレタンフォーム、布 イタリア ALFREX JAPAN	110・97・66/39	ウC92-1
60	マリオ・ベリーニ Mario Bellini (1935-)	キャブ 1976 コードバン革 カッシーナ社 ニューヨーク近代美術館永久展示品	55・47・80/43	ウC92-5
61	川上 元美 Motomi Kawakami(1940-)	アルフレックス NT 1977 formed plywood,leather webing アルフレックスジャパン社	55.6・56.5・77/44	ウC95-12
62	ペーター・オピスビク Peter Opisvik(1939-)	バランス・チェア 1979 積層合板、クッション STOKKE社	52・72・46	ウE89-4
63	マーク・ニューソン Mark Newson (1963-)	エンブリオ・チェア 1988 スチールパイプ・フレーム、発泡ウレタン、ニット イデー社	80・91.5・80/33	ウE89-8
64	喜多 俊之 Toshiyuki Kita (1942-)	リクライニング・チェアBlue	52・67・60/28.5	ウC95-1
65	喜多 俊之 Toshiyuki Kita (1942-)	フォールディング・チェア&テーブル(ロンディネ) 1991 マジス	38・50・78.5 55・40・66	ウC95-2
66	フィリップ・スタルク Philippe Starck (1948-)	コスト 1985 成形合板、スチールパイプ フランス	48・55・80/45	

表1.4 芸術学部椅子資料一覧 (2004年10月現在)

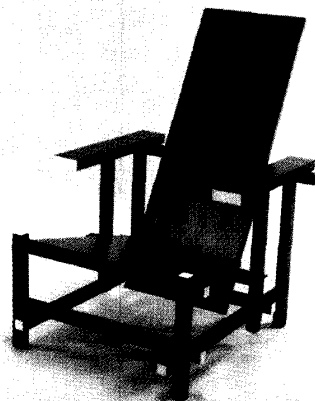
番号	作 者	作 品 名	W*D*H/S*H(cm)	備品番号
67	Don Chadwick, Bill Stumpf	アロン・チェア 1996 new material suspension Haman Miller, Inc.	68・60・99/49	ウE98-2
68	シャルロット・ペリアン Charlotte Perriand(1903-1999)	ペリアンチェア S-7260s 1955 成形合板 ハードウェア商会、天童木工	44・520・63.5/43.5	ウE01-2
69	倉俣史郎 Shiro Kurumata(1934-1991)	アップルハニー	48・53・72/43	ウE01-1
70	藤森健次	座椅子 1963	33・49・40	ウE01-5
71	カール・ブルーノ・マットソン Carl Bruno Mathsson(1907-)	ハイバックチェア&オットマンMA-562 MA-563 1976 ブナ積層材、布張り 天童木工	67・91.5・91/40 56・69・39	ウE01-3 ウE01-19
72	磯崎 新 Arata Isozaki(1931-)	モンローチェア 1971 カバ材 天童木工	54・54.5・140/44	ウE01-6
73	フランク・ロイド・ライト Frank Lloyd Wright(1867-1959)	ハイバックチェア 1908 サクラ材、 カッシーナ社	40・45.5・133.5/46	ウE01-7
74	フィリップ・スタルク Philippe Starck(1948-)	ミス・ココ (210 Miss C.O.C.O) 1998 アルミニウム、サーモプラスチック カッシーナ社	41・49.5・80/44.5	ウE01-8
75	ハンス・J・ウェグナー Hans J.Wegner(1914-)	Yチェア 1949 ビーチ材、縄編み カール・ハンセン社	55・54・72/42	ウE01-9
76	ペーター・オプスビク Peter Opsvik(1939-)	トリップ・トラップ 1972 ビーチ材 ストッケ社		
77	ペーター・オプスビク Peter Opsvik(1939-)	ウィング・バランス 1983 ストッケ社	Ø73 h48-74	
78	ペーター・オプスビク Peter Opsvik(1939-)	マルチ・バランス 1981 ストッケ社	47・41-59	
79	ペーター・オプスビク Peter Opsvik(1939-)	ザ・シット・バランス 1991 ビーチ材、クッション ストッケ社	47・83・86-94	
80	ペーター・オプスビク Peter Opsvik(1939-)	デュオ・バランス 1984 ストッケ社	63・104・123	
81	ペーター・オプスビク Peter Opsvik(1939-)	ベンデユラム 1983 ビーチ材 ストッケ社	51.5・61.5・910	
82	ペーター・オプスビク Peter Opsvik(1939-)	アクチュラム 1995 ビーチ材 ストッケ社	52・66・89	
83	Wolfgang Rebirth	ヒッポ 1995	25・94・45	
84	Terje Ekstrøm	エクストレム 1984	76・70・79-83	
85	Burkhard Vogtherr	カノスチェア(ハイバック) CR-G403CKJA8	66.5・66~86・107~125	
86	Burkhard Vogtherr	カノスチェア(ローバック) CR-G401CKJ68	66.5・57~74・97~115	
87	Burkhard Vogtherr	カノスチェア(ビジタータイプ) CK-401CKJ28	55・60・85.5	
88	コクヨ商品開発課	コルサチェア(付付) CK-986KJ27	58.5・54.5・80.5	

表1.5 芸術学部椅子資料一覧 (2004年10月現在)

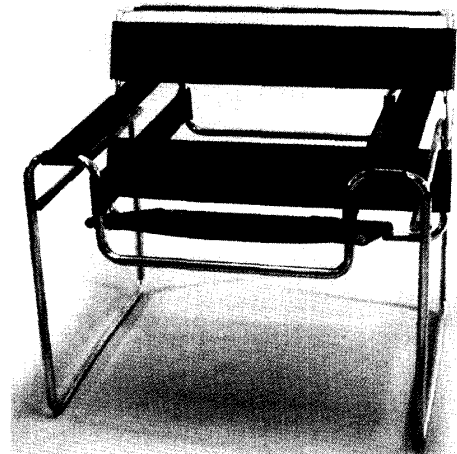
番号	作 者	作 品 名	W*D*H/S*H(cm)	備品番号
89	コクヨ商品開発課	コルサチェア CK-985KJ17	53・545・80.5	
90	コクヨ商品開発課	スクリーンチェアCK-506KP66	57・64.5・120	
91	IDEO デザインチーム	事務用チェア/リープ Bタイプ フルバック14129布張り5-312-3108	h 92~105	
92	IDEO デザインチーム	ブリーズチェア468190MH 5-311-6004	69・68・106.5/41~53	
93	内田洋行	カート126201 背座布張りブラック 5-316-2100	61・56・81.5	
94	チャールズ&レイ・イームズ Charles Eames(1907-1978) Ray Eames(1912-1989)	ラ・シェーズ 1948 FRP, スチール, ウッド ヴィトラ社	150・82.5・87/31.3	ウE03-5
95	ヴァーナー・パントン Verner Panton (1926-1998)	パントン・チェア 1960 ポリプロピレン ヴィトラ社	49・57・82 /49.5	ウE03-1
96	田辺 麗子 Reiko Tanabe(1934-)	ムライ・スツール 1961 成形合板 天童木工	44.5・43.5・36	ウE03-7
97	山中 康廣・曾原厚之助・山中阿見子 Yasuhiro yamanaka(1938-) Atunosuke sohara(1938-) Amiko yamanaka(1938-)	マッシュルーム・スツール 1961 成形合板, チーク 天童木工	45.4・45.6・38.5	ウE03-6
98	エーロ・アアルニオ Eero Aarnio (1932-)	パステイル・チェア 1967 FRP アスコ社, アデルタ社	94.5・95・52.5/31.3	ウE03-2
99	ガエタノ・ペッシェ Gaetano Pesce(1939-)	ブロードウェイ 1993 エポキシ樹脂, ステンレススチール	50・39・75/	ウE03-4
100	フィリップ・スタルク Philippe Starck (1948-)	ミス・トリップ 1996 ポリプロピレン, 白樺 カッシーナ社	40・50.5・86.5/47	ウE03-3



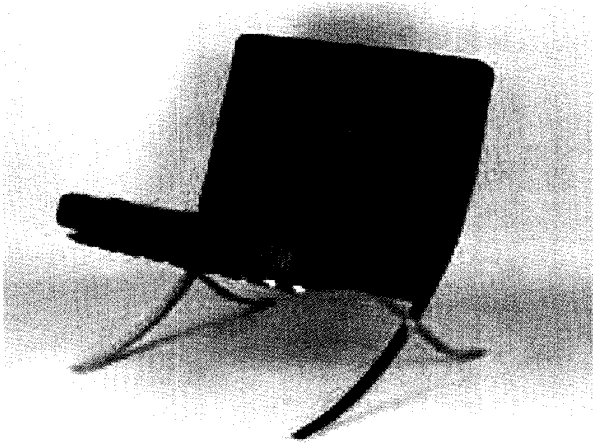
付図1
1. オットー・ワグナー
「アーム・チェア」 1902



付図2
2. ヘーリット・リートフェルト
レッドアンドブルー 1918



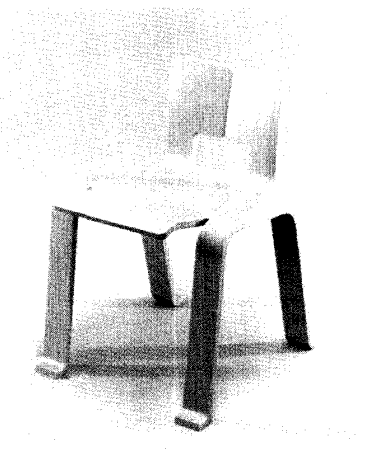
付図3
3. マルセル・ブロイヤー
「ワシリー・チェア」 1925



付図4
4. ミース・ファン・デル・ローエ
「バルセロナ・チェア」 1929



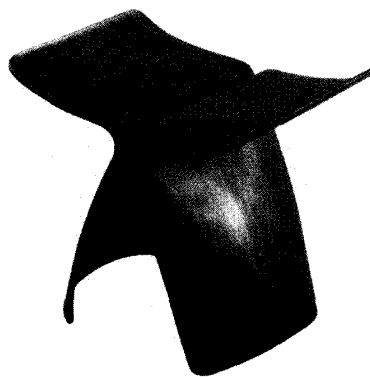
付図5
5. チャールズ・イームズ
「ラウンジ・チェア&オットマン」 1956



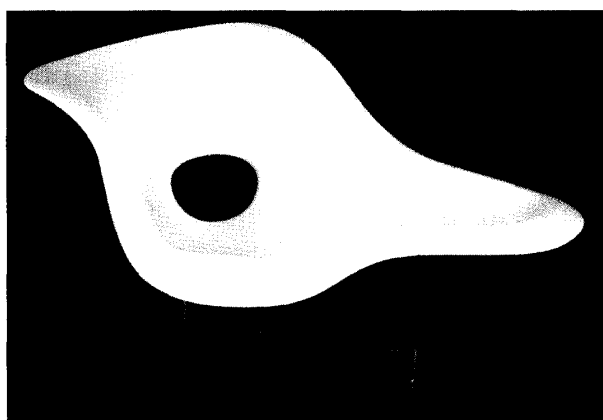
付図6
6. シャルロット・ペリアン
「ペリアン・チェア」 1955



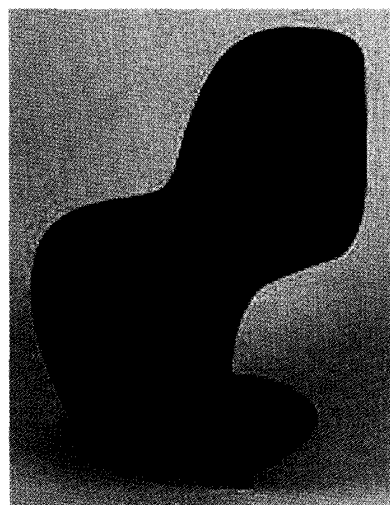
付図7
7. エーロ・サーリネン
「チューリップ・チェア」 1956



付図8
8. 柳 宗理
「バタフライ・スツール」 1956



付図9
9. チャールズ&レイ・イームズ
「ラ・シェーズ」 1948



付図10
10. ヴァーナー・パントン
「パントン・チェア」 1960